

社会構成主義が Weick 組織理論に与えた影響

星 井 進 介

Abstract

The purpose of this study is to discuss Weick's organization theory in connection with social constructionism. Karl E. Weick suggested an organization theory based on the concept of organizing. The process of organizing is composed of enactment, selection, and retention. In accordance with enactment by actors within the organization, the society is composed of the enacted environment. A major focus of social constructionism is to develop a method of constructing social reality. Social constructionism considers the importance of relationship and discourse. In this study, I tried to examine a social interaction from a social constructional point of view and determined the theoretical relationship between Weick's concept of organizing and social constructionism.

キーワード……Weick 組織理論 社会構成主義 言語ゲーム 言説 関係性

1. はじめに

近年の組織を取り巻く環境を捉えて、不安定でダイナミックな変化が続く急流の早瀬¹⁾に例えられる(Robbins 2005 : 434-437)。このような組織環境の捉え方は、組織やそれを取り巻く環境は急激に変化するために、現在いかなる状態であるかを示したところで、それは役に立たないという想定(Weick 1969 : 1)に近い。変化や過程の考え方について Weick(1979 : 55)は、2 点間を移動するものがあり、さらにその 2 点も移動するというイメージで捉えること²⁾が必要であると言い、変化や過程、行為こそが組織の営みをより正確に描写するものであると論じている。

Weick の組織論は、組織現象を捉える際の複数の解釈がある多義的状况の中で、いかに人々が行為を連結させ、組織化を形成していくかを中心課題として挙げている。このような Weick の組織観の特徴は、組織現象の観察において、固定的、静態的な意味合いを持ち、名詞で表される「組織」として捉えるのではなく、「組織化」という動詞で見なければならない、としていることである。そこで想定されているのは、柔軟性をもって常に変化する組織である。過程志向的な「組織化」という視点に立つことで、(1)組織を客観的な実在物として捉えるのではなく、不断に変化している過程としてとらえる必要があること、(2)人々の相互連結行動という行為に

もとづく関係性が組織化の重要な要素であること、という二つの側面が見てとれる。

Weick は『組織化の心理学』において、組織化の背景と定義について次のように述べている (Weick 1969 : 173)。

組織とは流動的で、絶えず変化しており、絶えず再遂行を必要としており、そして、ある時点でこの流動性が「凍結」されたときだけ、組織が実在するようにみえる。このことは、組織化という点から組織を定義しなければならないことを意味している。組織化とは条件つきで関連している諸過程にはめ込まれている連結行動によって、実現的環境のなかの多義性を除くことから成っている。

この組織化の定義における連結行動とは、二人ないしそれ以上の行為者の中で発展し維持される反復的、互酬的、相互依存的な諸行動から成り立つもので、いかなる組織体をも構成している基本的要素 (Weick 1969 : 174) を意味している。そして、『組織化の社会心理学(第2版)』においては、次のように組織化を定義し、説明を行っている (Weick 1979 : 4-5)。

組織化とは意識的な相互連結行動によって多義性を削減するのに妥当と皆が思う文法と定義される。

組織化は文法のようなものである。というのは、それは、行為者に理解できる社会的過程を形成するためにいかに種々の相互連結行動を組み立てるかに関するルールや習慣の体系だからである。

この組織化とは、組織メンバーの行為によって生み出された環境、すなわち、相互に依存的なメンバーらの行為によって構成されている環境へ適応することから成立する (Weick 1969: 54)。組織ならびに組織メンバーは、単なる外的環境ではなく、組織内での相互行為によって形成され実現された環境、すなわちイナクトされた環境 (enacted environment) に適応しているのである。Weick が主張する環境とは、このイナクトされた環境を示している。

Weick は組織化過程を、社会的相互作用によって行われるイナクトメント・淘汰・保持の 3 つの要素からなるとしている。このうちイナクトメントは、組織化過程において外的環境と直接やりとりする唯一の過程である。イナクトメントは、何らかの事象の変化を認識して組織の新たな環境を創り出す行為のことであり、組織メンバーが環境を創出する上で果たしている積極的な役割を示している。イナクトメントによって創り出された環境が、イナクトされた環境である。イナクトメントは、組織と環境との関係において、有意味な環境を創り出すプロセスであり、リアリティーを構築している (Weick 1995 : 41)。イナクトメントならびにイナクトされた環境という言葉は、人や組織は、あくまで主体的かつ主観的に社会や環境を認識し、創造す

るということを意味しているのである。

このような組織化という概念にもとづく組織論を展開する Weick は、ポストモダン(遠田 1998 ; 2001 ; 2005)や組織認識論(加護野 1988)、解釈主義(小原 2006 ; 高橋 2009)からの影響を指摘されている。と同時に、Weick が説く、組織化過程の要素であるイナクトメントによって環境が構成されるプロセスが組織にとって非常に重要なものであるという観点から、Weick の組織化理論が社会構成主義³⁾にその理論的背景を求めているとも考えることができる。

本稿では Weick 理論の理論的前提が社会構成主義にあるのではないかと考え、両者の考えを論考する。両者の考え方を合わせて検討することによって、新たな分析視座が生まれることが期待される。以下、第2章では社会構成主義について述べる。続いて、第3章で Weick の組織理論と社会構成主義との理論的関連性について検討を行った結果を報告する。

2. 社会構成主義をめぐる議論

社会構成主義は、哲学や社会学、言語学などの多くの学問領域から影響を受けている学際的な考え方である(Burr 1995 : 2)。社会構成主義は、社会や環境、意味、知識などの現実が客観的なものとして存在するのではなく、人々の相互行為を通じた社会的な構成プロセスによって生み出されるとする考え方である(Berger and Luckmann 1966)。このような考えは、今までのものの見方について疑問を投げかけた。例えば伝統的な観点では、「唯一絶対の正しい真理が存在しており、言葉の意味というのは客観的なものである」、「実証によって事実の観察を行い、論理的な言葉によって事実を写しとることができる」とする論理実証主義の立場がとられていた。しかし社会構成主義は、「社会は、人々の関係性の中から創り出される」、「ある特定の事実も人々の意味付けの活動を通して生み出される」という立場に立つ。現実是人間の社会的相互作用を通じて形成されるのであり、事実の意味も主観的に構成されているとするのが社会構成主義の考え方である。

この社会構成主義の基本的な考え方は、社会学の分野では Berger and Luckmann によって、心理学の分野では Gergen によって唱えられた。Berger and Luckmann (1966)は、社会構成主義の視点から知識社会学について考察した。世界が人々の社会的慣行によって構成されることを論証し、社会は人間の産物であること、社会は客観的事実であること、そして、人間は社会の産物であることを説いた。また、Coulter (1979 : 164)は『心の社会的構成』において、考える、思考するという概念は人の心的状態における特定事象の現れではなく関係概念であり、公的な現象であると論じている。このように社会構成主義では個人よりも人間関係のネットワークに焦点を合わせている(McNamee and Gergen 1992 : 22)。社会構成主義の主張は、現実社会的に構成される、という点にある。社会構成主義の関心は社会的な過程であり、人の行為の源を関係性に求め、言説⁴⁾のプロセスに着目して社会にアプローチするものである(Gergen 1994b : 16)。

この第 2 章では、社会構成主義について概説する。2-1 節では社会構成主義が生まれた背景と基本的な考え方を述べる。2-2 節では、言語と関係性の観点から Wittgenstein が説く言語ゲームについて検討する。

2-1 社会構成主義

社会構成主義の主張は、現実社会的に構成されること、言葉や対話が世界を生み出すことであり、「社会的に構成された現実」という概念に取り組むことを課題としている(Gergen 1994a : 280-282)。ここでは、Gergen の著書(Gergen 1994a ; 1994b ; 1999)をもとにして、社会構成主義の背景と、その基本的な考え方についてみていく。

2-1-1 伝統的科学的観と新しい科学的観

従来の伝統的科学的観は、「物—心」、「外界—内界」、「客観—主観」図式で表される二元論を前提としていた。社会構成主義は、このような二元論パラダイムと決別し、新しい科学的観にもとづいて社会現象の観察ならびに分析に取り組むものである。

二元論パラダイムにおいて自己に価値をおくということは、外界に対して内なる私的意識に価値をおくということを意味している。これは、知覚し考え決定する自己、という心理的な世界があって、同時に私達の思考の外側に客観的かつ物質的な世界が存在すると考えるものである(Gergen 1999 : 12)。例えば、伝統的科学的観において「理解する」ということの意味は、神秘のベールで隠されている人間の行為の性質をベールを剥いで把握すること、である(Gergen 1994a : 141)。これは、人間の社会的行為を客観的な一つの実在とみなす立場に立っており、それを理解するためには、覆われている多くのベールを剥いで客観的事実を明示する必要があるという考え方が背景にある。この二元論的な世界観は、例えば心的世界と物的世界との因果関係をどのように説明すればよいのかという問題を有している。心理的なものが物質的な変化を生み出したり、逆に物質的なものが心理的な変化を生み出したりするが、こうしたことがなぜ可能なのかという説明は、いまだなされていない(Gergen 1999 : 12-13)。一方で、「理解する」ということは経験したことに意味を割り振ること、という捉え方がある。これは、神秘のベールに覆われた社会が存在することを前提としない新しい科学的観にもとづくものである。このような考えは、限界と行き詰まりを示している伝統的な科学的観に立脚する論理実証主義的アプローチに対する不満が背景にある。このようなことから Gergen は社会構成主義に着目しなければならないと説く。

社会構成主義では、論理実証主義のように、知識は個人の頭や心の中にあると考えるのではなく、共同体の中にあると考える。知識が生成されるのは個人の内的プロセスにおいてではなく、コミュニケーションという社会的プロセスにおいてであると考えられる。人間の理性は、社会的相互作用の中で生成され、社会的な真実があるとすれば、その真実を創り出す人々による共

同体が存在するからなのである。したがって、社会構成主義的な立場において知識や真実は客観的な実在物ではなく、人と人との対話などによる社会的相互作用に伴って生成されたものの性質にもとづく共同的創造物とされる(Gergen 1994a : 280-281)。

Gergen(1999 : 12-44)は伝統的な西洋思想にもとづく考え方に疑問を呈し、我々が常識としている西洋的な自己観、一人一人の人間はその身体の内側で意思決定をする理性的な行為主体であるという常識について論考している。我々は、自分の行為は自分で決定しているという感覚こそが私達の存在の核であると考えている。ところがポストモダンの考え方をもとにして、こうした常識が決して当たり前ではないこと、むしろ疑ってみる必要があることを示している。ポストモダンとは、現実や世界というものは相対的かつ多元的であり、絶対的・客観的真理が存在するという考え方を否定する。

社会構成主義は、二元論の否定ならびに知識が世界の正確な表象であるという前提の否定という立場に立つ(Gergen 1994b : 323)。そして社会構成主義における世界の構成は、観察者の心の中ではなく、関係性において生じる。関係性の多くは言語を用いたコミュニケーションによって行われるため、現実や世界は言葉によって構成されることになる。言語自体が自分自身と世界の経験を構造化する仕方をもたらし、人が用いる概念は言語に先立って生まれるのではなく、言語によって初めて作られるのである(Burr 1997 : 52)。社会構成主義において言語は、真実を反映するものではなく、社会関係を創出するものなのである。

2-1-2 言語と関係性

社会構成主義の立場では、言語を用いたコミュニケーションなどの社会的相互作用によって、知識や自己、現実、環境が生成され、意味付けられて成立する。すなわち現実や世界は人々の多様な主観、また人それぞれの認識によって生成するのである。社会構成主義の研究の関心は、対話や言語、関係性が、いかにして人々を取り巻く社会を創り出しているのかという点にある。

社会構成主義的想定においては、現実や世界を創り出し、意味を生み出している社会的プロセスの中の言語が強調される。意味の概念については、個人の頭の中での意味付けという観点から定義されることが多いが、相互に関連した他者との意味共有に関する問題がある。他者との意味共有という問題は、個人が意味を生み出すという信念にもとづいて考える限り解決することができない(Gergen 1994b : 342)。社会構成主義的な考え方では、意味共有や世界の理解の仕方というのは、客観的な観察や、実在する社会において妥当とされる慣習にもとづくものではなく、人々が互いに関わり合う社会的プロセスの創出によるものである。

従来の伝統的科学観では、個人主義的な立場で物事を感じ、考え、感情をもち、行為を決定する自己なるものに重きを置いている。しかし、この伝統的な想定にもとづく考え方に欠陥があることも明らかになった。自己という事実を構成し直すことができる一つの可能性は、社会構成主義における共同的な取り組みの中から生まれてくると考えられる。社会構成主義は、知

識は個人の心の中ではなく、人々の関係性の中で生まれてくるものとする(Gergen 1999 : 183-184)。社会構成主義では個人よりも関係が、孤立よりも絆が、対立よりも共同が重視される。人々の関係性にもとづく相互作用の過程を通じて言語が生まれ、その言語によって人は自分自身を理解可能な存在にすることができる。このように個人ではなく関係性が社会生活の基本的単位となるのである(Gergen 1994b : 339)。社会構成主義の立場に立てば、関係性は個人に先行し、個人という概念は社会的過程の産物となる。Gergen(1999 : 195)は、あらゆる意味は関係に由来し、自己と他者は共に意味の生成の中に浸っていると述べている。社会構成主義の意義は、関係性の現実を作り、理解可能な言説を生み出し、社会生活に新たな可能性を与える関係の実践を生み出すことにある。

デカルトは、一体我々は何を信頼できるのかという問いに対して、私達が推論しているということだけは疑いようがないものであるとして、この推論のプロセスこそが我々の存在を保証するのであると説いた。そして、私の理性は、私が見聞きしたことすべてを疑うように命じるかもしれないが、理性自体を疑うことはできない。もし理性の存在を信頼できるのであれば、私は自分自身の存在をも確信できるようになるとして、「我思う、ゆえに我あり」という言葉を示した。しかし Gergen(1994b : ii-iii ; 1999 : 325-326)は、そもそも疑うことは本当に個人の心の活動なのかと疑問を呈し、この想定そのものをまずは疑ってかかるべきであると主張する。そもそも懐疑は、心の中の理性的プロセスではなく、言語的に遂行されるプロセスであるとした方がより説得力をもつ。有意味な言語は社会的な相互依存の産物であり、言葉の意味についての互いの合意がなければ、言語は成立しない。このことから我々の考えや行為に確信を与えてくれるのは、個人の心ではなく関係性であり、様々な関係性のプロセスに入っていくことの必要性を説いた。言説はある個人のみにも属するものではない。意味のある言語を紡ぎ出すということは社会的な共同実践であり、ある言葉や行為は、その意味についての社会的合意がなければ言語を構成することはない。我々に確信を与えているのは共同体における関係のプロセスなのであり、関係がなければ意味のある言説は存在しない。また、意味のある言説がなければ理解可能な対象や行為はありえない。Gergen はデカルトのあの格言「我思う、ゆえに我あり」を、「言説あり、ゆえに我あり」(Gergen 1994b : iii)、「我々は関係する、ゆえに我あり」(Gergen 1999 : 326)と言い換えるべきであると提唱する。

2-2 言語ゲーム

社会構成主義は、上述のとおり言語と関係性を鍵概念として、社会的な共同実践の取り組みを重視する。Gergen(1994a : xxvi)は、このような社会構成主義の立場を Wittgenstein 的と位置付けて、Wittgenstein が説く言語使用における文脈依存性に着目している。そこで本節では、言語活動を一種のゲームとみなす言語ゲームの考え方について検討を行う。

2-2-1 言語ゲームとは

言語の意味は、言語が関係性のパターンの中で機能するあり方にあり、社会的なフレームによって言語の意味を構成することができる(Gergen 1994b : 66)。社会構成主義は、言葉の意味は社会的使用の産物であるとする Wittgenstein の考え方と同じくするものである(Wittgenstein 1953 : 49, 命題 43)。Wittgenstein は、言語と言語の織り込まれた諸活動の総体を「言語ゲーム」と名付けた。この言語ゲームにおいて、進行する関係性のパターンの中で言葉が使用されるあり方を通して、言葉は意味を獲得する。しかし言語ゲームは、言語を含む人間の行為全般を指し示す総称と捉えるほうが適切である。橋爪(2009 : 116)は、言語ゲームとは、規則・ルールにしたがった人々のふるまいであると定義づけている。人が言葉話す、行為するなどの人間のふるまい全般が言語ゲームである。社会は言語ゲームの集まりであり、人々のふるまいが一致することの結果として、意味の共有や感覚の共有が発生するのである。

伝統的な言語観では、言語は世界を写しとるものであり、出来事や対象の写し絵であるとされる(Gergen 1999 : 52)。言語ゲームは、この言語の写し絵メタファーをゲームメタファーで置き換えて、言葉は言語ゲームの中で用いられることによって、その意味を獲得するものとした。言葉が意味するのは、その言葉の使われ方であり、言葉が意味を獲得するのは、その言葉がルールの内部でいかなる機能を果たすかによる。そして、言葉を認識し、話を理解するということは、その言語が属する言語ゲームの中のルールに身を委ねてしたが、ゲーム参加者の1人になることなのである(神尾 2008)。

言語ゲームとは、ルールにしたがった人々のふるまいのことであり、ふるまいの一致である。逆に、ふるまいが一致しているなら、そこにルールがあることになる。永井(1995 : 149-156)は、このルールとふるまいの逆転こそが、言語ゲーム概念の最大のポイントであると指摘する。ルールを正しく理解しているから一致した行動が生まれるのではなく、逆に、一致した行動がなされることでルールが正しく理解できる。言語ゲームにおいて言葉を使う人は、その言葉の用法や慣用を理解していることを前提として言葉を使うのではなく、根拠なく、他の可能性を思いつくことなくそれを使用する。このように、言葉の用法や慣用の視点に立たないことこそが、言語ゲームのルールを成立させる。いわば、言語ゲームは何かに基づけられることのない遂行的な事態なのである(橋爪 1985 : 66)。

2-2-2 生活形式

言葉の意味は、それを使う人の心や頭の中で決められるのではなく、生活の中で決められ、それが意味している行為や出来事よりも、むしろそれがどのように使われているかによって導き出される。Wittgenstein(1953 : 26-27, 命題 19)は、ある一つの言語を想像することは、ある一つの生活形式を想像することであると述べている。この生活形式という概念も重要である。生活形式とは、個々の言語ゲームが埋め込まれている、より広範な社会的営みのパターンである

(Gergen 1994b : 67)。すなわち、ゲームにおける言葉の意味は、より広範な社会的パターンにおけるゲームの意味に依存している。このように言語ゲームは、広い行動や事物のパターンである生活形式にはめ込まれているものであり、そこで用いられる言語は、我々の行為や出来事を単に写しとるものでなく、行為を包括する人間の生活や人生そのものを表している(Gergen 1999 : 54)。

言語ゲームを行うとき、人は共通の行動様式に依拠している。これを包括したものが生活形式であり、生活形式の中での言葉の文法は慣習や制度として定着している。そして、言語ゲームの根底にある確実性を疑うことは言語ゲーム自体を不可能にする。言い換えれば、あることを正しく認識していない者は、その言語ゲームを学んでいないか、間違ったやり方で行っているのである。我々が異質な言語ゲーム、例えば、ある神話に従って行動するという言語ゲームを行う人々に、彼らの誤りを指摘する場合を考えてみる。どのような理由を挙げてみても、そもそも何を根拠とみなすかという体系が異なっているために、彼らに誤りを納得させることは非常に困難である。日常的に人は、言語ゲームを行うときに自分自身の前提が他者にも当然共有されていることを前提としている。それは生活形式を通して実践され、獲得されたものであり、人々が子供の頃から様々な言語ゲームを学ぶことを通して自然に身についたものである。それは疑うという行為を可能にしている基盤であるが故に、それを疑うということは端的に無意味なのである(高見 1985)。

2-2-3 言語と意味

Krogh and Roos (1995 : 105-106)は組織知という概念と言語について論考し、「世界は言語によって生み出される。とはいえ、われわれは最初から言語を持っているわけではないので、言葉で物を呼ぶことはできない。むしろ、世界と言語は互いを形作っている」と論じている。このことをエスキモーについての例をもとに説明している。エスキモーは雪で覆われた世界で暮らしているために雪に対する約 30 種類の異なる言葉を持っている。そして、エスキモーは雪について多くの言葉を持っているために約 30 種類もの雪を識別することができるのであると述べている。このことから、人々が使用する言語は、いかに世界を経験するのかに影響を及ぼすものであり、すなわちそれは人々がいかにして世界を知るのかに影響を及ぼすのである。

虹という自然現象の捉え方も文化という生活形式を背景にした言葉によって異なっている。丸山(1981 : 119)は、英語では虹の色を 6 色に分節すること、そして、3 色や 2 色に分節する言語もあることを指摘した上で、「言語はまさにそれが活かされている社会にのみ共通な、経験の固有の概念化・構造化であって、各言語は一つの世界像であり、それを通して連続の現実を非連続化するプリズム」であると述べている。いわば虹の色の捉え方は、個々の言語がどの程度の分節を実現するか⁵⁾という点で違っているのである。すなわち、自然という連続の世界を、我々は言語という文化装置によって不連続なものに分節しているものであり、言語という文化を

通してしか現実を構成することができないのである(池上・山中・唐須 1994 : 184-185)。

言語ゲームのルールとふるまいの関係の観点から見ると、例えば、虹というものを定義できない人は、それが理由で虹を認識できないわけではない。虹そのものが定義できなくても、その生活世界において、その言語ゲームにしたがっていけば虹という現象を認識し、理解することができる。西(2001 : 11)は次のように言っている。「認識においては、むしろ言語の秩序が先立っており、言語の秩序によって人は世界を分節し、そこに物の秩序が現れる。人が諸観念を獲得するのも、言語を学ぶことによってなのである。」

2-2-4 言語ゲームの概念をふまえて

このような、言語ゲームが説く観点、どの言葉も関係性の一部であり、意味は広範な社会生活に埋め込まれた相互作用のプロセスから生じるとする点が社会構成主義にとって重要である。

ここまでで明らかになったように、言語ゲームメタファーでは言語にもとづく人々の関係が重要になってくる。また、このように考えれば、さきに述べた真理や事実という概念をよみがえらせることもできる(Gergen 1999 : 52-58)。事実という言葉はある社会や共同体の内部では非常に役立つものになりうる。ただし、その事実は一旦特定の生活形式を越えてしまうと人々を賛同させる力を失ってしまう。例えば、新聞記事や科学についての記述を「正確である」、「正しい」と考える時、それはその言葉があるゲームのルールの中で事実を伝えるものとして、あるグループの慣習に即したやり方で機能しているということを示している。また、伝統的な「真理—虚偽」の二元論における「ある言説が真理である」という言葉も、言語ゲームという観点から見ると、普遍的真理はローカルな一つの真理というものに置き換えることができる。つまり真理を、ある生活形式の内部でのみ有効となるような話し方、書き方として位置付けることが可能となる。ここに、言語のゲームメタファーと、それに伴う新しい意味観が示される。Wittgensteinによればテキストの意味は、テキストそのものが意味を持つのではなく、人々の関係においていかなる機能を果たしているかによってのみ決まる。共同体における人々の関係がテキストの意味に先行するのである。テキストを言説と言い換えれば、研究の関心は言説そのものから言説の社会的実用性へ、つまり特定の目的を持った社会によって、いかに言説が構成されていくのかという問題に移行する(Gergen 1999 : 63-64)。

3. Weick 組織論と社会構成主義

社会構成主義の立場に立って現実が社会的に構成されるとすれば、社会体系の一つである組織も同様に社会的に構成されるということが出来る。Gergen(1999 : 260-261)は、現実を社会的に構成するプロセスは組織にとっても重要な考え方であり、社会構成主義の観点から組織に関する効果的な実践を生み出すことに焦点をあてて、意味を創造するプロセスに入り込むことが

大切であると主張する。人は社会的・文化的形成物である環境や社会秩序を他者と共に創造する。社会秩序は、不断に進行中の人々の活動の産物であり、Berger and Luckmann(1966)は、この社会秩序の形成を習慣化、類型化、制度化という概念を用いて説明している。Gergen(1994b : 87)は、『現実の社会的構成』(Berger and Luckmann 1966)を社会構成主義のバイブルと称している。第3章では、この『現実の社会的構成』にもとづいて Weick の組織化概念と社会構成主義との関連性を読みといていく。

3-1 習慣化から類型化へ

人の全ての活動は、それが繰り返されると一つのパターンに収斂していく。このパターンは労力の節約ということで再生が可能になり、事実上、その行為の遂行者によって一つの範型として理解されるようになる。これが習慣化である。習慣化された行為が、他者と共有されることによって類型化が生じる。この過程は集団のみならず、2人の人間が新たに相互関係を形成する場合にも現れることを認識しておくことが重要である(Berger and Luckmann 1966 : 82-90)。

それでは、2人の人、AとBとがいて、どのような方法で類型化が生み出されるのか。まずAはBが行動するのを眺める。AはBの行動に何らかの動機や意義を認め、その行為が習慣的に繰り返されるのを見て、その動機を反復的なものとして類型化する。Bがその行動を反復し続ける時、Aはやがて「またやっているな」と自分にいい聞かせることができるようになる。と同時にAは、Bが自分に対して同じ動作を繰り返していると考えられることもできる。両者の相互作用の過程において、類型化は特定の行動パターンによって表現されるようになるのである。類型化によって、AはBによって繰り返される役割を密かに自分のものにして、それを自分自身の役割遂行のためのモデルに仕立て上げる。こうして相互に類型化された行為の集まりが生じることになる。これらの行為はそれぞれの役割の中に習慣化され、あるものは個別に遂行され、またあるものは共同で遂行される。こうした相互の類型化は、それだけではまだ制度化というには足りないが、制度化がすでに核の形において現れている。

このBerger and Luckmann(1966)が提唱する習慣化から類型化という流れによる社会的秩序の形成機構は、Weickが説く組織化の考え方の理論的関連性を指摘することができる。Bergerらと同様に、Weickが注目する組織現象も不断に変化していく流れや過程として捉えられる。Weick(1979)が説く組織化は前述のとおりイナクトメント・淘汰・保持の過程によって行われるが、その過程は2人ないしそれ以上の人びとの相互に連結した行動、相互連結行動から構成される。Weick(1979 : 116-141)は、この相互連結行動を明確にするために集合構造(Allport, 1962)、相互等値構造(Wallace, 1961)、最小社会状況(Kelley, 1968)の3つの概念を用いて説明している。

Allport(1962)により唱えられた集合構造概念のポイントは、人は最初手段について収斂するのであって目的についてではない、ということである。この集合構造という概念は、繰り返し相互に構造化され合う行動をベースにしており、孤立した個人には見出されない。組織メンバ

一の関心が収斂するのは、他者が自分に利益を与えようと各人が予期しており、しかも、これがどのようにして達成されるのかについて各自が類似した考えをもっているからである。まず最初に、ある構造がいかにか形成されるのかという手段・方法についての収斂がある。次いで、人々は一連の相互連結行動をくり返す。そして、各自がもつ多様な目的を達成するための手段として相互連結行動に収斂すると、多様な目的から共通の目的へのシフトが生じる。続いて、目的達成のために手段の多様化、分業化が起こる。この最初に共有される目的の一つは集合構造の維持と保存であり、それはメンバーや行為の類型化、規範の明確化などに現れる。

上述の集合構造では、道具的行為(手段)が大事であって、確信や目的の共有は相互連結行動を持續させる上で不可欠なものではないことが示された。これは Wallace(1961)の相互等値構造という概念を用いて説明される。相互等値構造は、ある人の目的とする行為の実現が他者の行為に依存しているときに生ずる。他者のその行為は、ある人の行為により導き出されるものであり、そのパターンが互いに満たされ、繰り返されることで2人の営みは相互等値構造となる。この相互等値構造に必要なものは、目標の相互共有ではなく行動の相互予測である。

そして、Kelley(1968)が提唱した研究技法である最小社会状況をもとに、集合構造がどのように発展し機能するのかについて示される。これは次のような実験で検証された。2人の人が、互いの存在を知らずに別々の部屋に入れられている。各自は他者の結果を制御する2つのボタンのうち1つを押すことができる。一方のボタンは罰を、他方のボタンは報酬を与える。両人共、自分自身の結果を直接制御することはできないが、他者に起こることに影響を与えることができる。この場合、2人にとって、各自が報酬を受け罰を回避するような相互に有利な解に到達することは可能なのか、またそれが可能とすればどんな条件の下でか、ということが問題となる。研究結果によれば、その関係を知らずに無意識に、そうしようと慎重な計画を立てずに無意図的に、言語や会話なしに暗黙のうちに、相互に有利な相互作用を生み出すことは可能であり、相互連結のためには、相互の共有など必須ではないと結論している。

これら Weick(1979)が説く行為者の相互連結行動による分業化の進展、ならびに相互作用の予測可能性の観点についても、その理論的背景を Berger らの論述にみることができる。Berger らは、類型化によって行為者の共同活動はルーティーンの領域に入り、両者間での分業を可能にすること、そして類型化の段階において最も重要な成果として、両者間の相互作用が予測可能なものになることを指摘している(Berger and Luckmann 1966 : 88-89)。

3-2 制度化のはじまり

さらにここでは Berger and Luckmann(1966 : 90-104)より、A と B の2人の間の相互関係に第三者が加わったケースを考えてみる。ある社会が A と B との間の相互作用によって形成されて維持されている類型化の段階では、この社会における客観性という特性はまだ弱く、容易に変化しやすいものにとどまっている。A と B の行為はルーティーン化されてはいるものの、いま

だ2人の意識的な枠組みにおさまっている。この類型化の社会においてAとBは、自らが作り上げた世界をその成り立ちからよく知っている。ところが新たな行為者となる第三者がこの社会に入り、この行為を引きつぐ過程になると、社会の客観性という性質に影響を与えて状況は質的に異なったものとなる。第三者の出現が社会的相互作用の性格を変えるのである。AとBの2人間の共通した行為によって生まれた類型化による形成物は、第三者によって明確な客観性を獲得する。言い換えれば、類型化によって形成された秩序や制度は現実性をもち、明確な事実として行為者らに経験される制度化段階に到達するのである。こうした世界は現実的かつ固定的で、もはや容易には変革できないものとなる。新たにこの社会に加わった第三者にとっては、自然的現象の客観性と社会的構成物の客観性を見分ける能力はなく、AとBの2人によって作り上げられたこの世界が、第三者にとっての世界そのものになる。例えば言葉についても、新たに社会に参加した第三者にとっては、事物はどのように名付けられたもの以外の何物でもなく、それ以外には名付けようがない。言葉と同様に社会における秩序や制度なども、第三者にとっては既に存在しているものを与えられただけであり、変革のしようがなく、自明のものとしてそこに存在している。

制度化に伴うこのような客観性の構築は、第三者に与える影響と共に、社会を作り上げたAとBの両者に対しても社会的現実の客観性を強固にさせる働きをもつ。他者への社会秩序の継承過程というのは、その社会を構成した人々の現実感覚を強化するものであり、その社会における意味付けを事後的に形作るもの、ということができる。すなわち、第三者の出現によってのみ、人は現実的な社会的世界の構築について語るができるということである。AとBの2人によって形成された世界では、その2人によって諸々の状況を作り変えることが可能であると共に、2人は記憶をさかのぼることによって社会的秩序がもつ根源的な意味に到達することができる。ところが第三者が習得した言葉やルールは、伝達・継承によるものであり、彼は記憶によっては元々の意味にたどり着くことは不可能である。それゆえ制度化の段階においては、この社会的状況のもつ意味を、第三者が納得できるように首尾一貫性をもって合理的かつ客観的で包括的な説明をしてやるが必要になる。この説明によって第三者は、この社会における秩序を獲得し、AとBの2人は社会のもつ正当な意味を事後的に確認することができるのである。

しかし同時に、制度的世界の客観性は、いかに現実的かつ絶対的なものとして現れようと、やはり人によって生み出され、構成された客観性であることに留意しなければならない。制度的世界は客観性という性格をもって現れるが、かといって、それを生み出した人間の活動から切り離された独立した地位を得るものではない。社会は人の産物であり、その社会は客観的な現実である。と同時に、人は社会の産物でもある。創造物は創造者に対して逆に働きかけもするのであり、人とその制度的世界は相互に作用し合うのである。

Berger and Luckmann(1966)にもとづいてAとBの2人に第三者が加わった制度化について論

述した。この点に関連して、Gergen(1994a: 100)は言語使用の観点から次のように述べている。

人々は直接観察できる事物を言葉を用いて表現している。互いにさまざまな言葉を用いることによって常にその言葉を使ってもいい条件、その言葉が使えない条件が確立されていく。そのような営みをとおして共同体は言語的な慣習を作り上げていく。つまり他人がその語を適切に使用しているか否か、観察によって容易に決定できるのは言語的慣習ができ上がっているからである。

これは Gergen による、A と B の 2 人による類型化の過程から、第三者が加わった制度化へと進む段階での言語使用の適切化に関する言及とすることができる。Wittgenstein (1953 : 83-84, 命題 83)は言語ゲームにおいて、ルールがあるからゲームなのではなく、ゲームが成り立っているからそこにルールが見いだせると考えた。言い換えればルールがあるから行動が一つになるのではなく、行動が一緒だから、そこには規則があると考えられるのである。そして意味形成の点からみると、意味体系があるから意味が伝わるのではなく、伝わっているから意味体系があるのであり、言葉や行為の意味は、相互のコミュニケーションや関係性の結果として、事後的に、回顧的に形成される。この回顧性という考え方も Weick 組織理論を理解する上で重要な概念である。

三者による相互関係と組織化に関して、Weick は次のように論じている。Weick(1969 : 75)が組織化概念の要素として挙げている項目のうち、「三者関係は組織論における基本的分析単位である」という項目がある。そこでは、(1)組織とは二項目間を取り持つ因果関係である、(2)その二項目間の関係は、第三項目の状態によって影響を受ける、(3)二項目の情報に対して同時に志向する一人の人は、組織化の一つの典型を示している、と述べられている。さらに Weick は、あるものを有意味にするには「もの」・「関係」・「別のもの」という3つの事柄が必要であると説く(Weick 1995 : 148-150)。すなわち、二つの要素と一つの関係である。そして組織におけるセンスメイキングでは、社会化や伝統、前例などの何らかの過去の瞬間が要素の一つになっており、「過去の瞬間+連結+現在経験している瞬間」という組み合わせによって、現在の状況における有意味な定義を作り出していると論じている。

Berger らが論じた 2 人の間での相互作用から 3 人の間での相互作用への移行プロセスは、『センスメイキング イン オーガニゼーションズ』(Weick 1995)で提示された間主観性から集主観性への移行プロセスの理論的前提を意味しており、同書で示された組織化定義との関連性を指摘することができる。Weick は組織化とセンスメイキングには共通するところが多く、組織とセンスメイキングプロセスの礎は同じものであると述べている(Weick 1995 : 112)。センスメイキングとは、意味(sence)の形成(making)を表しており、いわば、何かを意味あるものにするのである。そして Weick はセンスメイキングを論じるために、間主観性と集主観性の考え方を取

り入れて、組織化を、間主観性と集主観性の間を行き来する運動であると捉えている。ここで間主観性とは、個人的な思考から2人以上の会話によって思考や感情、意図が統合されて、我々という意識に移行することであり、解釈を相互に強化する働きをもつ。そして集主観性とは、相互作用が社会構造ないし集合意識へと総合され、一段上のレベルに移行することを意味しており、ルーティーンを相互に結びつけるものである。Weick が示した間主観性と集主観性の概念を用いた組織化定義の理論的前提を、Berger らが説く類型化から制度化への移行過程にみることができる。

Weick(1979 : 280)は、組織には柔軟性と安定性とのバランスの維持というアンビバレントな特性が求められると説く。一過性でない環境変化に適応するべく現行のやり方を修正するために柔軟性が、一時的かつ規則的な環境の変化に対処するために安定性が、それぞれ必要なのである。Weick(1995 : 225)によれば組織とは、間主観性と集主観性によって定義される組織化のプロセスを、継続的コミュニケーションという手段によって結びつける社会構造であると概念化されている。これまでのことから Weick は、柔軟性を間主観性に、安定性を集主観性のレベルに求めている。よって、間主観的な性格をもつ類型化の段階が柔軟性機能発現に有効であり、集主観的な性格をもつ制度化の段階が安定性をもった働きを発揮するのに適していると言える。

3-3 社会構成主義の視点からみた Weick の組織化概念

社会や組織の秩序形成において、習慣化・類型化・制度化という概念にもとづいて検討した。一般的に人によって繰り返された行為は、ある程度習慣化される傾向をもっている。そして同じ場所にいる観察者に同様の行動を引き起こして、類型化が起こる。このような行為者相互の類型化が生じるためには、その場にいる行為者同士が共通の意味を持ちうるような行為であることが必要である。類型化されなければならないのは、行為と共に共有の意味形成を図る過程である。このようにして形成された行為の意味共有が、次の制度化段階での第三者に対する合理性や客観性の付与につながっていく。習慣化は一人の行為であり、類型化は二人の間の行為、そして類型化は三人の間での行為であり、段階が進むにつれて、生み出され形作られた意味は頑健で客観的なものになっていく。

社会あるいは組織の現実とは客観的なものとして存在するのではなく、社会的な構成プロセスの産物である。この社会的相互作用を通じて作り出されたものは、人々にとっての現実として認識される。この場合、人々が安定した相互作用を続けるためには、何らかの現実や行為、意味について、ある一部分的な意味共有が必要となる。社会における現実とは、人々の相互作用によって形成されて意味共有が進展していく。組織とは、社会的に構成された現実についての合意である。その合意の共有度が高まるほど、人々の間の相互作用はより円滑化して、組織化過程の進展へとつながっていく。

Weick(1995 : 91)は、Berger らの言葉を引用して、「時が経つにつれて、人はパターン化された仕方で行い、そのパターンをリアリティーとして自明視するようになり、そして自らのリアリティーを社会的に構築する」と述べているが、この言葉の含意が習慣化・類型化・制度化という考え方で説明された。さらに、組織行動とセンスメイキング(意味形成、物事が分かること)のプロセスは同じものであり、それは「秩序を押しつけ、逸脱を減じ、単純化し、結びつけることである」とも述べている(Weick 1995 : 112)。このことが示唆しているように、Weick は現実が社会的に構成するプロセスを組織にとって非常に重要なものと考えている。

我々が社会的現実として観察する組織現象は、基本的に組織メンバー相互の関係性にもとづく行為やコミュニケーションによって生み出される。そうした現象は相互行為が繰り返される中で、当初存在していた多義性が削減されて秩序を形成していく。社会的現実という言葉は、現実が社会的に構成されることを表現している。いわば人が見ているものは、その人自身が作り出したものなのであり、組織を取り巻く環境は、組織自らが生み出したものなのである(Weick 1979 : 198 ; 1995 : 179-180)。

4. おわりに

本稿では、現実の社会的構成プロセスを人と人との間の相互作用から論じた Berger and Luckmann (1966)の議論をもとに、Weick 組織論と社会構成主義との関連性に着目して組織化についての論考を試みた。Weick は3つの主著(Weick 1969 ; 1979 ; 1995)において、それぞれ組織化概念を提示してきたが、社会構成主義の立場に立つことによって Weick が説く組織理論について一貫性をもった説明が可能となったといえる。

社会構成主義は、現実や環境が社会的相互作用によって生成されると見なす。すなわち、多様な主観や認識の仕方をもった人々の相互作用と社会的関係のプロセスによって、現実や環境は意味付けられ、生み出されると考える。人や組織を取り巻く環境自体が、その人や組織によって構成されるという考え方である。これは、環境をイナクトメントによって創り出されたものとして捉えることと同義であり、イナクトされた環境とは社会構成主義に依拠する Weick がもつ環境観を表しているといえる。

多くの場合、現実や環境の社会的構成における相互作用は、言語や行為などを伴うコミュニケーションによって行われる。社会構成主義においては、言語と関係性というキーワードが繰り返し登場する。Weick は組織というものを、多義性が削減されて意味共有が図られる組織化のプロセスと認識しており、この組織化という概念を用いることで組織現象を捉えようとした。組織化は組織メンバーの言葉や行為、関係性の構築によって形作られる。そして、組織化プロセスの進展によって言葉や行為を規定する組織の秩序やルールが生み出され、さらに、その作り出された社会秩序や規定が言語の使用を伴う組織化過程に影響を及ぼすのである。この組織

化過程を観察、分析するためには、言葉や行為、関係性に着目することが必要となる。Weick(1985 : 142-143)は、変動する状況における安定性の回復、多義性の削減の方法として、言語、行動、相互作用の3点を示している。そのうちの言語については、安定的な結合を促して実体を構築する、重要な情報の意味を知らせる、意味が生み出されることを挙げて、言葉の重要性を説いている。これらの点をふまえて Weick(1995 : 147)は、組織研究においては言語と組織特性の間の相互関連という問題に取り組むことを提起している。今後は、言葉や行為を含む言説に関すること、組織メンバーの関係性を構成する間主観性ならびに集主観性の考え方についての検討が課題として挙げられる。

<注>

- 1) Robbins(2005 : 434-437)は組織環境について、比較的静かな均衡状態である「静かな海」と、不安定でダイナミックな状態である「急流の早瀬」があるという2つの見解を示している。「急流の早瀬」において組織は、いわば10mほどのいかだであり、このいかだで急流の早瀬が続く怒り狂う川を下らなければならない。このいかだを操るメンバーの中に、この川を旅した経験のある者は誰もいない。川には予期せぬ蛇行や障害物があり、いかだの明確な目的地ははっきりしない。過去の社会状況が「静かな海」であったのに対して、現在は、変革が常に起きている状態であって安定性や予測可能性は低く、多くの場合は急流の早瀬から抜け出すことはないとしている。さらに、このような状況では、マネージャーは今まで一度もやったことのないゲームをプレーすることを求められ、そのルールはゲームの進行と共に作られていくと述べている。このゲームとルールに関する論述は、言語ゲームの考え方との関連性を指摘できる。
- 2) Weick のこのような考えは、Wittgenstein(1969 : 32, 命題 97)が説く「河床の比喩」の考え方と近いものがある。Wittgenstein は、ある概念同士のつながりが変化することについて、河床を流れる水の動きと河床そのものの移動を例に説明している。「河床の比喩」とは次のとおりである。「神話の体系が流動的な状態にもどり、思想の河床が移動するということもありうる。だが私は河床を流れる水の動きと、河床そのものの移動とを区別する。両者のあいだに明確な境界線をひくことはできないのであるが。」
- 3) 社会的相互作用によって社会や現実、自己が生成されるとする考えを、Burr(1995)は「社会的構築主義」、Berger and Luckmann (1966)ならびに Coulter (1979)は「社会的構成」、Gergen(1994a)は「社会的理性主義」と称している。本稿では、これらが説く概念を「社会構成主義」と記す。
- 4) Gergen(1994b)には、言説に関する具体的な定義の説明はない。Burr(1995 : 74)は言説を「何らかの仕方ですべてまとめて、出来事の特定のヴァージョンを生み出す一群の意味、メタファー、表象、イメージ、ストーリー、陳述、等々を指している」と定義している。ここでは言説を、言語や対話、行為を含む、ある一つの出来事ある観点から表現する特定の仕方、とする。
- 5) 虹という自然現象の分節化を実現するという行為は、Weick(1979)が説く組織化の自然淘汰モデルにおいて、生態学的変化で環境中の変化を囲い込む行為であるイナクトメントにあたる。イナクトメントによって分節され、囲い込まれた環境が、イナクトされた環境である。Weick(1969)では、イナクトメントが実現、イナクトされた環境が実現的環境と訳されている。

<参考文献>

- Allport, F.H. (1962) "A structural-conceptual conception of behavior : Individual and collective", *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 64, pp.3-30.
- Berger, P.L. and Luckmann, T. (1966) *The social construction of reality*, Doubleday and Co. (山口節郎訳 (2003), 『現実の社会的構成』, 新曜社)

- Burr, V. (1995) *An introduction to social constructionism*, Routledge. (田中一彦訳 (1997), 『社会的構築主義への招待』, 川島書店)
- Coulter, J. (1979) *The social construction of Mind : studies in ethnomethodology and linguistic philosophy*, Macmillan press. (西阪仰訳 (1994) 『心の社会的構成』, 新曜社)
- 遠田雄志 (1998) 『グッバイ! ミスター・マネジメント』, 文眞堂
- 遠田雄志 (2001) 『ポストモダン経営学』, 文眞堂
- 遠田雄志 (2005) 『組織を変える<常識>』, 中央公論新社
- Gergen, K.J. (1994a) *Toward transformation in social knowledge, 2nd edition*, Sage (杉万俊夫・矢守克也・渥美公秀監訳 (2004), 『もう一つの社会心理学』, ナカニシヤ出版)
- Gergen, K.J. (1994b) *Realities and relationships: soundings in social construction*, Harvard university press (永田素彦・深尾誠訳 (2004), 『社会構成主義の理論と実践』, ナカニシヤ出版)
- Gergen, K.J. (1999) *An invitation to social construction*, Sage (東村知子訳 (2004), 『あなたへの社会構成主義』, ナカニシヤ出版)
- 橋爪大三郎 (1985) 『言語ゲームと社会理論』, 勁草書房
- 橋爪大三郎 (2009) 『はじめての言語ゲーム』, 講談社
- 池上嘉彦・山中桂一・唐須教光 (1994) 『文化記号論』, 講談社
- 加護野忠男 (1988) 『組織認識論』, 千倉書房
- 神尾和寿 (2008) 「ヴィットゲンシュタインにおける「私的言語」の問題」, 『流通科学大学論集—人間・社会・自然編—』, 第21巻, 第1号, pp.75-88.
- Kelly, H.H. (1968) "Interpersonal accommodation", *American Psychologist*, 23, pp.399-410.
- Krogh, G. and J.Roos (1995) *Organizational epistemology*, Macmillan (高橋量一・松本久良訳 (2010), 『オーガニゼーション・エピステモロジー』, 文眞堂)
- 丸山圭三郎 (1981) 『ソシユールの思想』, 岩波書店
- McNamee, S. and Gergen, K.J. (1992) *Therapy as social construction*, Sage (野口祐二・野村直樹訳 (1997), 『ナラティブ・セラピー—社会構成主義の実践—』, 金剛出版)
- 永井均 (1995) 『ウィットゲンシュタイン入門』, 筑摩書房
- 西 研 (2001) 『哲学的思考—フッサール現象学の核心—』, 筑摩書房
- 小原久美子 (2006) 「解釈主義的組織文化論の経営学的意義と論点」, 『広島県立大学論集』, 第10巻, 第1号, pp.1-17.
- Robbins, S.P. (2005) *Essentials of organizational behavior, 8th edition*, Pearson education (高木晴夫訳 (2009) 『【新版】組織行動のマネジメント』, ダイヤモンド社)
- 高橋量一 (2009) 「オートポイエーシス・システムとしての組織認識」, 『亜細亜大学経営論集』, 第45巻, 第1号, pp.3-39.

社会構成主義が Weick 組織理論に与えた影響 (星井)

高見保則 (1985) 「言語ゲーム」, 『実践哲学研究』, 第 8 号, pp.1-16.

Wallace, A.F.C. (1961) *Culture and personality*, New York, Random House.

Weick, K. E. (1969) *The social psychology of organizing*, Addison-Wesley (金児暁嗣訳 (1980), 『組織化の心理学』, 誠信書房)

Weick, K. E. (1979) *The social psychology of organizing, 2nd ed.*, Addison-Wesley (遠田雄志訳 (1997), 『組織化の社会心理学(第 2 版)』, 文眞堂)

Weick, K.E. (1985) *Sources of order in underorganized systems : Themes in recent organizational theory*, in Lincoln, Y.S. (ed.) *Organizational theory and inquiry : The paradigm revolution*, pp.106-136, Sage (寺本義也・神田良・小林一・岸真理子訳 (1990), 『組織理論のパラダイム革命』, 第 4 章「不完全な組織化システムにおける秩序の源泉 : 最近の組織理論の主要研究テーマ」, pp.115-153, 白桃書房)

Weick, K. E. (1995) *Sensemaking in organizations*, Sage (遠田雄志・西本直人訳 (2001), 『センスメイキング イン オーガニゼーションズ』, 文眞堂)

Wittgenstein, L (1953) *Philosophische Untersuchungen*, Basil Blackwell (藤本隆志訳 (1976), 『哲学探究』, ウィトゲンシュタイン全集 8, 大修館書店)

Wittgenstein, L (1969) *Über Gewißheit*, Basil Blackwell (黒田亘訳 (1975), 『確実性の問題』, ウィトゲンシュタイン全集 9, 大修館書店)

主指導教員 (平松庸一准教授)、副指導教員 (高山誠教授・長尾雅信准教授)